

The Scarlet Letter と *Beloved*

—— 「スレイヴ・ナラティブ」の観点から ——

藤吉 清次郎

(高知大学人文社会科学系人文社会科学部門)

The Scarlet Letter and Beloved

—— From the Viewpoint of a Slave Narrative ——

Seijiro FUJIYOSHI

Humanities and Social Sciences Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University

Abstract: The main purpose of this article is to reconsider Nathaniel Hawthorne's *The Scarlet Letter* (1850) from the viewpoint of a slave narrative. In so doing, I make clear the limitations of *The Scarlet Letter* as a slave narrative by comparing it with Afro-American writer Toni Morrison's *Beloved* (1987).

So many slave narratives were written in antebellum America. These narratives must have had some influence upon *The Scarlet Letter* because Hester is described as a 'racial Other', or 'Africanist' in Morrison's term, and because her severe seven-year life with her daughter Pearl in Puritan society was very much like that of a slave mother. More concretely, this woman, who committed the sin of adultery, has to lead a miserable and lonely life as the "people's victim and life-bond slave" which the narrator describes. Because she was so worried about the future of Pearl, Hester sometimes has an urge to kill her, just like so many slave mothers did with their children. This woman who possesses the aptitude to be a feminist is so frustrated by life that she even feels driven to overthrow the system. However, after all, she decides to live with Pearl as a patient mother, rather than a rebellious woman. In a sense, she serves as a figure of patient submission to tyrannical authority. As for slavery, Hester's patient submission can be interpreted as an implicit acceptance of slavery.

On the other hand, unlike Hester, Sethe, a slave mother in Morrison's *Beloved*, kills her daughter Beloved to save her from enslavement. The narrator explains that the killing was caused by Sethe's "thick love". Sethe continues to suffer mental agony about it until she faces her harsh past. What should be noted about this slave mother is that even at the end of the story she never gives up her radical ideas about slavery. She is ready to fight against white people who discriminate against black people, and a white society which supports slavery. Therefore, *Beloved* can be regarded as a real slave narrative in that this novel thoroughly describes how inhumane slavery is.

In this way, comparing *The Scarlet Letter* with *Beloved* from the standpoint of a slave narrative, we can say that Hawthorne, as a White Anglo Saxon Protestant writer, feeling some sympathy for slaves, could not fully understand their plight under slavery.

キーワード：スレイヴ・ナラティブ，黒人奴隷制，ホーソーン，モリソン。

はじめに

ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)は17世紀ニ

ュー・イングランドを舞台とした作品であるが、今日、この物語に19世紀中葉のアメリカ社会を揺り動かした黒人奴隷制問題の影を読み取る評家は少なくない。例えば、ディムズデイル牧師(Dimmesdale)やチリングワース(Chillingworth)の描写に際し、暗黒、暗闇、悪魔といった言葉が繰り返される点に着目したジェイ・グロスマン(Jay Grossman)は、この二人の男に使われた"Black Man"という言葉が黒人男性を暗示していることを論じている(Grossman15-17)。『緋文字』においてホーソーンが確信をもって描いたものが、「異人種間雑婚」であったとするグロスマンはディムズデイルとチリングワースを「黒人男性」とする一方、ヘスター(Hester)を「白人女性」と考え、ディムズデイルとヘスターの間に生まれた娘パール(Pearl)を人種の混淆した存在として捉える。グロスマンの意見は奴隷制廃止運動が高まる中で黒人男性と白人女性の人種的な交わりを恐れたという当時の白人たちの内面心理を意識したものであり、説得的なものである。¹

しかし、グロスマンの論考で気になるのは「異人種間雑婚」のもうひとつのヴァージョン、すなわちヘスター＝黒人、ディムズデイル牧師＝白人とする「異人種間雑婚」の立場に十分な考察が加えられていないことである。物語にはヘスターが黒人であることを暗示するような要素が少なからず存在していることを考えると、² われわれ読者は彼女を黒人とする立場から、作品を読み直してみる必要もあるだろう。

この点、リーランド・S・パーソン(Leland S. Person)も指摘するように、ヘスターの置かれた状況は奴隷制下において子をもつ黒人奴隷の母親のそれを想起させる(656-8)。後で論じるように、共同体から孤絶状態の中で苦悩し、愛するが故に娘に殺意さえ覚えるヘスターの姿には奴隷制時代子供の将来を案じ、子殺しを犯す黒人奴隷の母親像が投影されていると推察される。本稿では、黒人奴隷の母親としてのヘスターの苦悩の諸相を考察するが、その際19世紀中葉の黒人奴隷の母親の苦悩を描き出した現代黒人女流作家トニ・モリソン(Toni Morrison)の代表作『ベラヴィッド』(*Beloved*, 1987)との比較検証を試みたい。というのも、アメリカ文学評論集『闇に戯れて：白さと想像力』(*Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*, 1992)のなかで、モリソン自身が19世紀、20世紀のアメリカ白人作家の描く黒人像に不満を表明していること、そして『ベラヴィッド』が娘をもつ黒人奴隷の母親の苦悩を描き出す物語であることに注目すると、このアフリカ系アメリカ人作家が白人作家ホーソーンの『緋文字』を意識していた可能性が高いと思われるからである。本小論では、スレイヴ・ナラティヴ(奴隷体験記)の観点から『緋文字』と『ベラヴィッド』を比較考察し、『緋文字』が有する問題点を考えてみたい。

1. 記号としての黒人ヘスターとパール

『緋文字』は「さらし台」の場面で始まる。町の人々を前にしてヘスターが立つ「さらし台」は奴隷の「競売の台」を連想させるが、この場面で注目したいのは、抱きかかえる不義の子パールの父親の名前を白状するように説得を受けるヘスターがその要請を頑なに拒む点である。³ ヘスターは群衆に向かって、"[M]y child must seek a heavenly Father; she shall never know an earthly one!" (I 68)⁴と主張する。曖昧性を特色とするこの小説にあって、このヘスターの沈黙こそが物語を牽引していると言っても過言ではないが、彼女の沈黙は自らの奴隷としての立場をも暗示しているように思われる。自身黒人奴隷であったハリエット・ジェイコブズ(Harriet Jacobs)が言うように、"[I]t was a crime for a slave to tell who was the father of her child." (Jacobs 13)であり、奴隷制社会において奴隷の女性は子供の父親(白人の奴隷主)の正体を明かせなかったのである。

物語の中では、ヘスターが時としてその母性故に凶暴な様相を帯びる様子が描かれている。「さらし台」から牢獄に戻る途中、ヘスターの様子について語り手は "in a state of nervous excitement that demanded constant watchfulness, lest she should perpetrate violence on herself, or do some half-frenzied mischief

to the poor babe"(I 70)にあったと述べている。パールが3歳の時、「総督の広間」において、この幼子を母親の庇護から切り離そうとする行政官を前に、ヘスターは "God gave me the child! ... He gave her, in requital of all things else, which ye had taken from me. She is my happiness!— she is my torture, none the less! Pearl keeps me here in life! ...Ye shall not take her! I will die first!"(I 113)と主張する。さらにパールが7歳の時、ピューリタン社会において隔絶状態にあったヘスターは、"At times, a fearful doubt strove to possess [Hester's] soul, whether it were not better to send Pearl at once to heaven, and go herself to such futurity as Eternal Justice should provide."(I 166)の箇所からわかるように、娘パールの将来を案じ彼女を殺してしまおうという衝動に駆られている。このように、ホーソーンはヘスターを奴隷と同じような孤絶的かつ隷属的な境遇に置きつつ、その中で愛するが故に子殺しを犯しかねない危険な母性愛をヘスターの重要な特徴のひとつとして描き出している。

上記のようなヘスターの人物造型には、当時起きていた奴隷による子殺しの事件が参考されているように思われる。デボラ・グレイ・ホワイト(Deborah Gray White)は1830年代40年代に自らの子どもを殺害した黒人奴隷の母親が少なからずいたという事例を指摘している(White 88)。この点、リーランド・パーソンが "the most striking examples of maternal infanticide in nineteenth-century literature involve slave mothers killing (or some times simply abandoning) their children in order to save them from enslavement."(Person 660)と述べているが、19世紀中葉のアメリカにおいて、奴隷の母親による子殺しが文学世界においても大きな関心事であったことが理解できる。このように『緋文字』を19世紀中葉のアメリカという時代的な文脈においてみると、ホーソーンが奴隷の母親による子殺し事件を意識してヘスターとパール親子を創造したという可能性は十分考えられる。

以上のように、ヘスターを黒人奴隷的な存在と捉えた場合、ひとつの疑問が生じる。つまり物語においてヘスターは17世紀ニュー・イングランドに生きた実在の人物アン・ハッチンソン (Anne Hutchinson)のようなフェミニストとしても描かれており、この女性フェミニストとしての側面を奴隷としての側面とどのように関係づけて解釈すればよいかということである。ジーン・フェイガン・イエリン(Jean Fagan Yellin)はヘスターの人物造型に奴隷制に反対した19世紀のフェミニストたちの影を指摘しているが(Yellin 132-145)、その点19世紀の代表的なフェミニストであるマーガレット・フラー(Margaret Fuller)は、女性の虐げられた社会的境遇を、次のように述べている。

As the friend of the negro assumes that one man cannot by right, hold another in bondage, so should the friend of woman assume that man cannot, by right, lay even well-meant restrictions on woman. (Fuller 20)

ここでフラーは女性の抑圧された立場を奴隷のそれと結びつけ、奴隷の解放とともに女性の解放を訴えかけている。⁵ フラーのようなフェミニストたちにとって、黒人奴隷、特に女性の黒人奴隷の存在は自らの権利主張をするのに好都合な存在であった。ホーソーンがフラーや義姉エリザベス・ピーボディ(Elizabeth Peabody)などのフェミニストの主張を熟知していたことを考慮に入れば、この作家が黒人奴隷制問題と女権問題とを結びつけてヘスターの人物造型を行ったことは十分考えられる。したがって、ヘスターに付与されたフェミニストとしての側面と黒人奴隷としての側面は必ずしも矛盾するものではないと考えられる。

ここで話をヘスターの内的葛藤に戻そう。7年間ピューリタン社会において疎外状態に置かれていたヘスターはパールについて、この娘が生まれ来たこと自体が善なのか悪なのか、としばしば問わざるを得ず、さらにその疑問は女性全体の在り方に対する疑念へと発展して行く。

Every thing was against her[Hester]. The world was hostile. The child's own nature had something

wrong in it, which continually betokened that she had been born amiss,...and often impelled Hester to ask, in bitter of heart, whether it were for ill or good that the poor little creature had been born at all.

Indeed, the same question often rose into her mind, with reference to the whole race of womanhood. Was existence worth accepting, even to the happiest among them? (I 165)

キャロライン・M・ウオイダット (Caroline M. Woidat) も指摘するように、このヘスターの抱く疑問は多くのスレイヴ・ナラティブの中で投げかけられたものであり、特に子供の誕生について奴隷の母親が抱く疑問でもあった (Woidat190)。結局、ヘスターはこのような大きな疑念を抱きながらも、子殺しもせず、女性への抑圧に対してもひたすら堪え忍びながら生きていく道を選択する。物語の結末部において、ヘスターは自分を頼ってやってくる女性たちに向かって、自らの確信を語って聞かせる。

She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven's own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness. (I 263; 下線部は筆者)

従来の解釈に従えば、これはヘスターが父権制社会において男性に虐げられた女性に対して、互いの幸福な男女の関係が形成されるような成熟した社会の到来を予言することによって、彼女たちを励ましているのだということなるが、しかしヘスターが黒人奴隷をイメージした存在であると想定した場合、ヘスターの見解は異なる意味合いを帯びてくる。キャロライン・ウオイダットが指摘するように、このヘスターの "firm belief" には奴隷制解決の在り方に関するホーソーンの見解を窺い知ることができる (Woidat190)。ホーソーンは大学時代の同級生フランクリン・ピアス (Franklin Pierce) のための大統領選挙用パンフレットのなかで、奴隷制を "one of those evils, which Divine Providence does not leave to be remedied by human contrivances, but which, in its own good time, by some means impossible to be anticipated, but of the simplest and easiest operation, when all its uses shall have been fulfilled, it causes to vanish like a dream" (XXIII352) とする考えを示したが、ヘスターが女性たちに聞かせた "firm belief" は、奴隷制を「悪」であり、撤廃すべき制度としながらも、その解決は人間の手で行われるべきものではなく、あくまで「神意」に任せるべきであるとするホーソーンの見解と通底するものである。換言すれば、物語の結末部におけるヘスターの見解と態度には19世紀中葉アメリカ社会において勢いを増していた奴隷制即時撤廃運動に対して異を唱えるホーソーンの意味が反映されていると考えられるのである。

最後に、奴隷制という観点から『緋文字』の結末に考察を加えておこう。作品結末においてディムズデルの死後、ヘスターとパールは旧世界に旅立つ。なぜヘスターはパールを旧大陸に連れて行ったのだろうか。それはヘスターがパールに奴隷としての苦悩を味あわせたくなかったからではないか。当時旧世界では人種差別はアメリカほど厳しくなかった。例えば英国は1807年には奴隷貿易を中止し、1820年には奴隷制を撤廃していたという史的な事実を考慮に入れると、混血児パールが当時のアメリカよりも人間としての自由と権利を享受できる旧大陸へ移住するという物語設定は十分説得的である。しかし、ヘスターのニュー・イングランドへの帰還はどのように解釈すればよいのだろうか。この帰還の意味については "[T]here was a more real for Hester Prynne, here, in New England, than in that unknown region where Pearl had found a home. Here had been her sin; here, her sorrow; and here was yet to be her penitence." (I 262-63) という箇所から、ヘスターが「改悛」の人生を送る決心をしたというのが通常の解釈であるが、当時の人種問題を考慮に入れれば、ホーソーンが

ヘスターにニュー・イングランドに帰還させたのは、アメリカの奴隷制の現状に対して配慮したためではないかとも考えられる。つまり記号としての黒人奴隷ヘスターをパールとともに旧世界に定住させることは、奴隷制度をあからさまに否定することを意味するからである。またパールがチリングワースから遺産を受け取る点について、リーランド・パーソンは "Even Pearl's inheritance from Chillingworth rather than from Dimmesdale makes a kind of sense — if Dimmesdale, with his exaggerated paleness, plays the role of slave-owning father." (Person 668) と述べ、人種的な観点から見た遺産譲渡に関する解釈を提出している。当時、奴隷のオーナーが奴隷との間にできた子供に財産を譲り渡すことなどあり得なかったのである。

以上のように、ホーソーンが『緋文字』を創作するに際し、当時流布していたスレイヴ・ナラティヴを意識し、その枠組みを積極的に取り入れた可能性は十分考えられる。しかし、ホーソーンは真の意味でスレイヴ・ナラティヴを理解できていたのだろうか。確かに、ホーソーンは物語の結末あたりで、語り手にヘスターを "the people's victim and life-long bond slave" (I 227) と言わしめ、奴隷のような境遇に置かれたこの女性を同情的に描いてはいる。しかし、これまで考察してきたようにヘスターに幼児殺しを実行させず、最終的に彼女の革新的な見解を封印し、彼女を体制に服従させるホーソーンは奴隷の母親の苦悩を理解できなかったのではないか。そこで次にホーソーンの描くスレイヴ・ナラティヴの限界を明らかにするために、トニ・モリソンの『ピラヴィド』を考察してみたい。

2. 『ピラヴィド』におけるセスとピラヴィド

まず『ピラヴィド』を考察する前に、スレイヴ・ナラティヴの本質を確認しておこう。奴隷制時代、6000とも言われる数のスレイヴ・ナラティヴが元奴隷たちによって書かれたが、そこには主に奴隷農園での生活、奴隷としての苦悩、そして自由を希求する思いが綴られていた。ただ注目すべきは、19世紀の元奴隷たちが自らの経験や思いをストレートには述べられなかったことである。つまり奴隷たちの悲惨な経験に関する叙述は、白人読者の上品な趣向にあわせるために編集が施されたのであった (Woidat 186)。この点19世紀の白人女流作家 リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child) は代表的なスレイヴ・ナラティヴである、ハリエット・ジャイコブズ (Harriet Jacobs) の『ハリエット・ジェイコブズ自伝』 (*Incidents in the Life of a Slave Girl*, 1861) の序文において、この問題について次のように述べている。

I am well aware that many will accuse me of indecorum for presenting these pages to the public; for the experiences of this intelligent and much-injured woman belong to a class which some call delicate subjects, and others indelicate. This peculiar phase of Slavery has generally been kept veiled; but the public ought to be made acquainted with its monstrous features, and I willingly take the responsibility of presenting them with the veil withdrawn. (Jacobs 3-4; 下線部は筆者)

黒人奴隷に深く同情していたチャイルドは奴隷制が有する悲惨な局面が隠蔽され、一般大衆の目に触れないようにされてきたと述べ、今こそ彼らにその事実を知らせるべきだと主張している。だが、このチャイルドの主張にも関わらず、元奴隷たちのスレイヴ・ナラティヴは白人読者を考慮して「心地の良い」作品になるように「編集」され続けたのである。

現代に生きる黒人作家であるトニ・モリソンはある意味で、19世紀のスレイヴ・ナラティヴで描かれなかった真実を描こうとした作家であるといえる。彼女は "The Site of Memory" というエッセイのなかで、自らの作家としての仕事について "My job becomes how to rip that veil drawn over

'proceedings too terrible to relate.'⁶と述べ、自らの作家の目的を"to fill in the blanks that the slave narratives left"⁷と述べている。モリソンの『ビラヴィド』はまさしく、そのような目的を果たすべく書かれた作品だと考えられる。この黒人女流作家は『ビラヴィド』について、次のように述べている。

I thought this has got to be the least read of all the books I'd written because it is about something that the characters don't want to remember, I don't want to remember, black people don't want to remember, white people won't want to remember. I mean, it's national amnesia.⁸

モリソンは『ビラヴィド』が自分の作品の中で一番読まれていない理由が、自分はもちろんのこと、物語の登場人物も黒人も白人も思い出したくない「何か」を描き出している点にあると分析している。もちろんその「何か」とは奴隷制に纏わる忌まわしい過去であるわけであるが、ここで重要なことはその過去がモリソンにとっても、黒人にとっても、白人にとっても、「過去」として馴致されていないということである。『ビラヴィド』においてモリソンは奴隷制に関する過去を単に「過去」の問題としてではなく、「現在」の問題として生々しく人々の記憶に甦らせ、「国民的記憶喪失症」を治療することを作家の役割として自覚しているのである。

『ビラヴィド』には、セス(Sethe)、ポール D(Paul D)、ハル(Halle)をはじめとする黒人奴隷たちが被った数々の精神的肉体的な虐待が赤裸々に描き出されているが、物語の関心は主に娘のビラヴィド(Beloved)を殺害した元奴隷の母親セスの内的葛藤に向けられている。『ビラヴィド』はマーガレット・ガーナー(Margaret Garner)という奴隷の母親が我が子を殺したという史実に大きなヒントを得て書かれた作品だが、セスが娘のビラヴィドを殺害しなければならなかった理由とは何か。

かつて「スイート・ホーム」という奴隷農園での仲間であったポール Dはその殺害の要因がセスの母性愛にあると捉えているようである。彼はセスが愛娘のデンヴァー(Denver)と激しく言い争うのを目撃し、次のように考える。

Risky, thought Paul D, very risky. For a used-to-be-slave woman to love anything that much was dangerous, especially if it was her children she had settled on to love. The best thing, he knew, was to love just a little bit;...(45)⁹

昔奴隷だった女が、何かをこれほど愛することが危険であること、特に、その愛が我が子に向けられるとき、とても危険であり、それ故に少しだけ愛することが最良であることをポール Dは自らの体験から心得ている。このようにポール Dはセスの母性愛について冷静な判断を下す人物として設定されているのであるが、別の場面において彼はセスに向かって、彼女の母性愛が"too thick"(164)だと述べ、愛しすぎることの危険性を説きさえる。それに対して、セスは"Love is or it ain't. Thin love ain't love at all."(164)と言って反論する。実際、逃亡奴隷として追いつめられたセスは、愛するが故に喉を鋸で切ることによってわが子を「安全なところ」に送り込むことに成功したのであった。「目の前にあるものを見て、私が恐ろしいと知っているものから、子供たちを護るのがわたしのしなくっちゃならないことよ。私はそれをやり遂げたわ」("It's my job to know what is and to keep them away from what I know is terrible. I did that." 165)と言うセスにとって、娘を殺害することこそが子供に自分が歩んだような悲惨な道を歩ませない唯一の方法であったのである。このような奴隷の逆説的な母性愛を語り手は"[M]otherlove was a killer."(132)と呼んでいる。

このように、モリソンは奴隷の母親による子殺しに奴隷制が生み出したこの上ない悲劇を見てい

るのであるが、『ピラヴィド』はセスのトラウマとそれからの解放を描いた物語だといえるだろう。手にかけて娘ピラヴィドが亡霊として姿を現すまでのセスは奴隷の状態から解放されていたにもかかわらず、過去と向き合うことができないが故に、いわば生きながら死んでいるような状態にあった。奴隷として打ちたたれ、無感覚になったその背中は彼女が過去を抑圧し、封印していることを象徴している。M・G・ヘンダーソン(Mae G. Henderson)がセスの背中傷について "For Sethe, these scars constitute traces of past deeds too horrible and violent either to forget or to remember, a situation that Morrison describes elsewhere as 'a perfect dilemma.'" (Henderson 87) と指摘しているように、奴隷制下で行われた残虐な行為はトラウマとなり、セスを絶望の淵に追い込む。しかし、セスはピラヴィドとの関わりのなかで、どれほど悲惨で残酷であろうとも、過去と対峙する必要性と、自分自身を救い生きる力を取り戻すことの重要性に目覚めて行く。セスが周りの黒人社会とともに生きて行くという決意をし、完全に自分を取り戻したとき、ピラヴィドは知らないうちに姿を消してしまう。

最後に『ピラヴィド』に関して注目したいことは、上記のようにセスは作品結末において新たな人生を始めることになるものの、そこには黒人と白人(社会)との和解が描かれていない点である。モリソンがそうした和解の可能性すら示せなかった理由を解く鍵は彼女の白人男性の描写にあると思われる。『ピラヴィド』に登場する主要な白人男性として奴隷園主ガーナー(Garner)とスクール・ティーチャー(Schoolteacher)らがいる。この二人の白人は一見黒人奴隷に対して対照的な態度をとるのであるが、しかし二人がともに黒人奴隷を人間として見なしていないことは明白である。確かに、ガーナーは奴隷たちに対して好意的に接してくれる人物であり、奴隷たちはその寛大さに感謝している。だが、この人物もまた奴隷を自分の「所有物」としてしか考えていない点が指摘されている。ガーナーが亡くなった後、彼を引き継いだスクール・ティーチャーは科学的な根拠に基づき、奴隷制を正当化し、セスたち黒人奴隷を動物として扱う。セスは彼の甥たちに強姦され、その連中にふくらんだ胸から乳を吸い取られることに激しい怒りを覚える。セスの夫のハルはその場面を目撃し、正気を失ってしまう。このように白人男性たちの非道な言動を容赦なく描き、黒人と白人の安易な和解を提示しないモリソンにとっては、奴隷制度は現在も続いているのかもしれない。つまりモリソンは安易な和解を示さないことによって、奴隷制撤廃後もアメリカ社会に蔓延る人種差別がいかにも根深いものであるかを指し示していると考えられる。

3. モリソンとホーゾン —— スレイヴ・ナラティヴを巡って

文学評論集『闇に戯れて：白さと想像力』の中でモリソンは、いわゆる「正典」とされる白人作家の作品がいかにも「自己規定」のためにアフリカ系アメリカ人に依存しているかを指摘している。モリソンはインタビューの中でホーゾンを含む19世紀のアメリカ白人作家の描く「黒人」について、次のように述べている。

The chances of getting a truly complex human black person in an American book in the nineteenth century were minimal. Melville came probably very close with classic complexities, but no real flesh and blood people. ...Each one of the white men in *Moby-Dick* has a black brother. They're paired together. Fedallah is the shadow of Ahab. Queequeg is the shadow of Ishmael. They all have them, and they work together in tandem all through the book. What I'm saying is that while there is no realistic representation, the subtextual information is powerful. It's all self-reflective. It's all about the fabrication of a white male American.¹⁰ (下線部は筆者)

モリソンはハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)を取り上げながら、

フェデラーがエイハブ船長の影であり、クィークエッグがイシュメールの影であることを述べ、白人作家が自分たち白人を自己定義するためのシンボルとして黒人を利用しているにすぎないことを鋭く指摘している。つまり黒人は文明人である白人の理性、近代性、秩序、血の純潔などの特性を確立するために、非合法的なセクシュアリティ、狂気、無秩序、野蛮、血の汚れなどの負の側面を担わされた「人種的他者」として機能しているというのである。

モリソンが目指したのはまさしく、そのような白人作家たちが捏造した文学的な枠組みから黒人を解放し、彼らに人間としての「声」を与えることである。スレイヴ・ナラティブに関して言えば、モリソンにとって白人読者を意識して「編集された」スレイヴ・ナラティブは真実を伝えるために書き換えられるべきものである。この点、『ピラヴィド』においてモリソンは、濃い愛情のために我が子を殺害しなければならなかった奴隷の母親の内的葛藤を克明に描き出すことによって、真の意味でのスレイヴ・ナラティブを完成させ、現代の読者に提示することに成功しているといえよう。セスは我が子を手をかけ、その忌まわしい過去から逃れようとしたのだったが、しかしこの過去が決してセスだけのものではないことは明白である。というのも、セスの過去は先に述べたように、アメリカ人が「国民的記憶喪失症」にかかったかのように目を向けようとしない奴隷制度を巡る忌まわしいアメリカ国家の過去を示唆しているからである。モリソンは『ピラヴィド』において'rememory' (201, 215)という言葉を使い、アメリカ人たちに奴隷制に関して失った記憶を再び記憶し直すことを要請しているように思える。このように、『ピラヴィド』は黒人問題を扱うだけでなく、その扱い方そのものを問題とする「メタフィクション」的な要素を持った小説であり、その意味において、この作品はポスト・モダン的な「スレイヴ・ナラティブ」と呼べるかもしれない。

以上のように、モリソンが描く奴隷制下における黒人の母親の苦悩という観点からみると、ホーソーンの黒人描写の限界も見えてくる。ラリー・J・レノルズ (Larry J. Reynolds) は "If Hawthorne had extended his imagination to take in the plight of the slaves, which even Lincoln found it impossible to do, it would be difficult to find a more thoughtful 'peaceful man' of the times." (Reynolds 65) と指摘しているが、黒人の少ない北部で生き、彼らと直接会話を交わすこともほとんどしなかったと思われるホーソンにとって、おそらく南部の黒人奴隷の苦悩は彼の理解を超えたものであっただろうと推察される。このように、『ピラヴィド』のセスの苦悩と『緋文字』のヘスターのそれをスレイヴ・ナラティブという観点から比較考察してみれば、われわれはモリソンが人種差別に関してアメリカ社会に突きつける重いメッセージを受け止める一方で、白人作家ホーソーンのスレイヴ・ナラティブの限界、あるいは黒人表象の限界を認識せざるを得なくなるのである。

注

1. 『緋文字』における「異種混交」の問題については、白川恵子「怪物は告白しうるか?-----ターナー、バンカー、ホーソンにみる南北戦争前期の犯罪体験記」に詳しい。
2. 齋藤忠利は「ナサニエル・ホーソンにおける黒人問題」という論文においてヘスターを黒人奴隷だと想定して、刺激的な論を展開している。齋藤はホーソンが当時の奴隷問題と大いに関心を持ち、その影響が『緋文字』の人物造型にも看取できることをさまざまな資料を駆使しながら、説得的に論じている。だが、私は『緋文字』における黒人問題を論じる齋藤の論考に若干の不満を覚えるものである。というのも、齋藤論文ではホーソンが創作の際意識したであろう当時のスレイヴ・ナラティブへの言及がなされていないからである。
3. ヘスターの容姿は彼女の黒人性を示唆するものであるとも考えられる。豊かな黒髪、黒い瞳を

- もつヘスターについて語り手は "She [Hester] had in her nature a rich, voluptuous, Oriental characteristic." (I 83) と述べているが、この語り手の言葉が意図するものはヘスターの「情熱」、「肉体的」、「他者性」であり、このような特性を帯びた魅惑的な女性が男性を誘惑し、墮地獄へと導くのはある意味、必然であると言えるだろう。この点、トニ・モリソンが『闇に戯れて』の中で述べる「アフリカニスト」、あるいは「アフリカニズム」の概念が参考になるであろう。モリソンはアメリカ文学の中でアメリカ白人を自己規定するために「黒人」、すなわち文学上の「アフリカニスト」がいかに捏造されたかを分析している。モリソンによれば、「アフリカニズム」は "the fetishizing of color, the transference to blackness of the power of illicit sexuality, chaos, madness, impropriety, anarchy, strangeness, and helplessness, hapless desire" (80-81) であり、「アフリカニスト」はそのような要素を備えた人物である。この点、第4の長編『大理石の牧神』(*The Marble Faun*, 1860) に登場するミリアム (Miriam) の性質は、ケニオン (Kenyon) 作製のクレオパトラ彫像を使って "fierce, voluptuous, passionate, tender, wicked, terrible, and full of poisonous and rapturous enchantment" (IV127) であると暗示的に述べられているが、ミリアムはまさしく、モリソンの指摘する「アフリカニスト」であると考えられる。
4. ホーソーン作品に関しては、*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII (Columbus: Ohio State UP, 1962-97) を使用した。巻数、頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。
5. リーランド・パーソンはフルーのフェミニストとしての発言について、"In arguing the case for women's emancipation, for example, Fuller links women and slaves, effectively commandeering the subject position of black women for her own rhetorical and political purpose." (662) と述べている。
6. Toni Morrison, "The Site of Memory." *Inventing the Truth: The Art and Craft of Memoir*. Ed. William Zinsser (New York: Houghton Mifflin Company, 1998), 191.
7. *Ibid.*, 193-194.
8. Toni Morrison, *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Daniller Taylor-Guthrie (Jackson: University Press of Mississippi, 1994), 257.
9. トニ・モリソンの『ビラヴィド』については、*Beloved* (NY: Penguin Books, 1998) を使用した。
10. *Conversations with Toni Morrison*, 264.

Works Cited

- Fuller, Margaret. *Women in the Nineteenth-Century*. New York: W.W. Norton & Company, 1998.
- Grossman, Jay. "'A' is for Abolition?: Race, Authorship, *The Scarlet Letter*." *Textual Practice* 7 (1993): 13-30.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 24 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Henderson, Mae G. "Re-Membering the Body as Historical Text." In *Toni Morrison's Beloved: A Casebook*. Ed. William L. Andrews and Nellie Y. McKay. New York: Oxford UP, 1999.
- Jacobs, Harriet. *Incidents in the Life of a Slave Girl*. 1861. Ed. Jean Fagan Yellin. Cambridge: Harvard UP, 1987.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. NY: Penguin Books, 1998.
- _____. *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Daniller Taylor-Guthrie. Jackson: University Press of Mississippi, 1994.
- _____. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge: Harvard UP, 1992.
- _____. "The Site of Memory." In *Inventing the Truth: The Art and Craft of Memoir*. Ed. William

- Zinsser. New York: Houghton Mifflin Company, 1998. 183-200.
- Person, Leland S. "The Dark Labyrinth of Mind: Hawthorne, Hester, and the Ironies of Racial Mothering." In *The Scarlet Letter and Other Writings*. Ed. Leland S. Person. NY: W.W. Norton & Company, 2005. 656-669.
- Reynolds, Larry J. "'Strangely Ajar with the Human Race': Hawthorne, Slavery, and the Question of Moral Responsibility." *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*. Ed. Millicent Bell. Columbus: The Ohio State UP, 2005.
- White, Deborah Gray. *Ar'n't I a Woman? : Female Slaves in the Plantation South*. New York: W.W. Norton & Company, 1985.
- Woidat, Caroline M. "Talking Back to Schoolteacher: Morrison's Confrontation with Hawthorne in *Beloved*." *Toni Morrison: Critical and Theoretical Approaches*. Ed. Nancy J. Peterson. Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 1997. 181-200.
- Yellin, Jean Fagan. *Women and Sisters: The Antislavery Feminists in American Culture*. New Haven: Yale UP, 1989.
- 齋藤忠利 「ナサニエル・ホーソーンにおける黒人問題」第14号『帝京大学国際文化学部紀要』2001年, pp.1-20.
- 白川恵子 「怪物は告白しうるか? ——ターナー, バンカー, ホーソーンにみる南北戦争前期の犯罪体験記」『ユリイカ』1999年5月, pp.236-254.

* 本論文は, 平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「ホーソーンと人種問題」による研究成果の一部である。

平成21年(2009)12月15日受理
平成21年(2009)12月31日発行